

【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

「懶」の字における意識の変化―字形による区別とその展開―

早稲田大学大学院 教育学研究科 国語教育専攻 修士課程二年 根本 駿

一 はじめに

「懶惰」という言葉がある。「なまけ怠ること」といった意味であるが、この「懶」という字には、いくつかの問題が含まれている。谷崎潤一郎は「懶惰の説」（『中央公論』一九三〇年五月号所収）において、次のように指摘する。

懶惰ということは、簡単にいえば「怠けること」である。普通、懶惰の「懶」の字の代りに「懶」の字を使って、「懶惰」と書くのをしばしば見受けるが、あれは間違いで、やはり「懶惰」が正しいようである。今、簡野道明氏の『字源』に拠って調べると、「懶」は「憎懶」などと用い、「にくむ」あるいは「きらう」の意である。「懶」の方は、「ものうし」「なまける」「おこたる」「つかれふす」の意で、柳貫の詩の、  
借<sub>二</sub>得<sub>一</sub>小<sub>一</sub>窗<sub>二</sub>容<sub>二</sub>吾<sub>一</sub>懶<sub>一</sub>  
五<sub>一</sub>更<sub>一</sub>高<sub>一</sub>枕<sub>二</sub>聽<sub>二</sub>春<sub>一</sub>雷<sub>一</sub>

という句が引例として挙げられている。なお『字源』から孫引きすれば、許月卿の詩に「半生懶意琴三疊」、杜甫の詩に「懶性從來水竹居」などがある。

「懶」と「懶」は単なる異体字の関係ではなく、別字種であるという指摘である。では、この説は一体いつごろ、どのようにして現れたのであろうか。本稿では、この説が成立した背景について、中国の字書（韻書）を中心に考察していく。そして、漢字に対する規範意識や漢字に働く力学について考える足がかりとしたい。

二 中国の字書（韻書）における記述

二―一 『説文解字』～『広韻』

本章では、時代順に中国の字書（韻書）の記述を見ていく。まず【図1】『説文解字』の記述を見ると、「懶」の字は存在せず「嬾」のみが掲載されている。字義は「懈也」とあり、「おこたる」ことであることがわかる。

【図1】『説文解字』（段注本）

各本作黨。今正。撫者許之黨字。諫者許之嬾字也。讀若潭。懈也。懈者怠也。集也。怠也。从女。賴聲。洛早切。此音於合韻得之。一曰發也。徐非是。

十一篇下

天

作臥也。小徐作臥食。今正。臥部曰。楚謂小嬾。書空也。凡日發。臥食。因之。或奪一字。或析爲二字。耳。中

【図2】『玉篇』（大広益会玉篇）

懶 力旱切  
俗嬾字

嬾 力但切  
懈惰也

次の【図2】『玉篇』において「懶」の字は親字として掲げられる。「俗嬾字」とされており、「嬾」を参照すると、「懈惰也」と、説文解





二二三 『五音集韻』 『四声篇海』

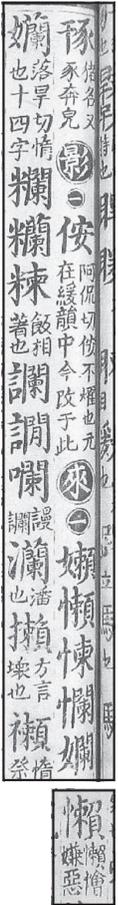
『集韻』において「憎懶嫌惡」という字義が加わったこと、その結果「嬾」と「懶」が担う音義の範囲が変わってしまったこと、そして字形による区別は行われていないことを確認した。次に、「五音を定則として韻を集めたもので、広韻を藍本とし、増入の字は集韻を藍本としている」(『中国学芸大事典』)という、『五音集韻』を見る。【図11】【図12】がその版本である。「惰也」という字義は『広韻』から、「懶憎嫌惡」という字義は『広韻』には存在しないため『集韻』から取ったものと考えられる。ここで注目すべきは、いずれの版本も「惰也」と「懶憎嫌惡」とで字形が異なっている点である。「惰也」の方は「懶」、「懶憎嫌惡」の方は「懶」となっている。『類篇』で行われていなかった字形による区別が行われているようでもあるが、果たしてこの字形の違いは意図的なものなのだろうか。

【図11】『崇慶新改併五音集韻』



同上

【図12】『大明正徳乙亥重刊改併五音集韻』

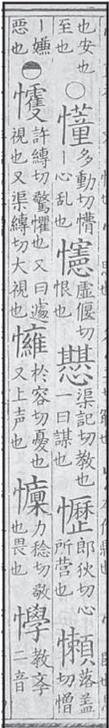


同上

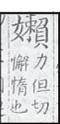
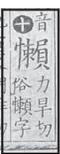
一つの可能性としては、「惰也」の字形は『広韻』を参照し、「懶憎嫌惡」の字形は『集韻』を参照したことによって、両字の字形が異なってしまったということが考えられる。しかし、もしそうであるとすれば、字形は逆になるはずである。『広韻』は概ね「懶」、「集韻」は「懶」で統一されていた。もし、「惰也」の字形は『広韻』を参照し、「懶憎嫌惡」の字形は『集韻』を参照したのであれば、「惰也」の字形は「懶」、「懶憎嫌惡」の字形は「懶」となるはずである。よって、これを藍本の違いによる字形の違いと断ずることはできない。しかし、『広韻』に「懶憎嫌惡」の字義はないことから、両字の藍本が別であることは確かであり、その過程で字形の不統一が起きたという可能性を捨てることはできないものと思われる。ここでは、意図的な字形の区別か否かの判断は保留とし、可能性の言及にとどめることにする。

次の『四声篇海』において、『集韻』『類篇』および『五音集韻』で起きていた事態に変化が見られる。【図13】を見ると、『俗字背篇』(白抜き)の+が示している。現存せず)

【図13】『四声篇海』



同上

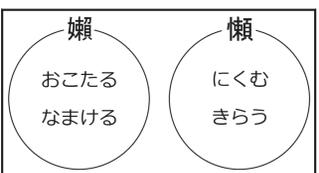


から異体字を取り込んでいる他、「懶」「嬾」の二字が親字として掲げられている。その字義は、「懶」が「憎―嫌悪也」、「嬾」が「懈惰也」とされている。これまでのものと合わせて、字形と字義（および字音）の関係をまとめると、**【表2】**のようになる。『五音集韻』では、意図的か否かはさておき「懶」と「嬾」という字形による区別がなされていたが、『四声篇海』ではこれとは違った形で字形による区別が行われている。「懶」と「嬾」という字形の区別によって、字義を区別しているのである。

「懶」から「おこたる・なまける」の字義が削除され、「嬾」にのみ記されている。その結果、「懶」の字義は「にくむ・きらう」のみとなっている。「嬾」は「懶」の俗字としての扱いから、別字としての扱いに変わっているのである。この関係を図示すると、**【図14】**のようになる。**【図10】**のように「懶」の俗字「嬾」にのみ認めていた「にくむ・きらう」という字義を「嬾」の字義から分離し、「懶」には専らこの字義のみを担わせている。このように「懶」と「嬾」とを別字として扱うことによって、「嬾」の俗字たる「懶」の方が担う字義の範囲が広いという事態を解消しようとしたものと推察される。『四声篇海』では、「懶」と「嬾」という字形の区別ではなく、「嬾」と「懶」という字形の区別によって字義のすみ分けが行われているのである。

**【表2】 形音義の対応関係①**

「広韻」	なまける・おこたる	にくむ・きらう
「集韻」	嬾  懶 (ラン)	—
「類篇」	嬾・懶	懶 (ライ)
「五音集韻」	嬾・懶	懶
「四声篇海」	嬾	懶



**【図14】 『四声篇海』**

## 二―四 『字彙』

『四声篇海』では「懶」と「嬾」による区別がなされていた。次に見る『字彙』では、この区別を土台として、(意図的な)「懶」と「嬾」による区別が生まれる。

**【図15】**『字彙』を見ると、「懶」と「嬾」両字とも親字として掲げられている。「嬾」については、「同嬾」とある。そこで「嬾」を見ると、「懈怠也」とあり、「懶」は「嬾」の俗字として「おこたる・なまける」という字義を持っていることがわかる。

一方、「懶」については、「憎懶嫌悪」という字義を記した後、蘇轍の漢詩「閑燕亭」を引用し、「與上懶字不同」という見解を示す。ここに、明らかな「懶」と「嬾」の使い分けの意識が見られる。『字彙』における以上の関係を図示すると、**【図16】**のようになる。

『字彙』は、『四声篇海』が行っていた「懶」と「嬾」の使い分け(**【図14】**)を取り入れた。さらに、「懶」を「嬾」の異体字とする、『玉篇』から『五音集韻』に至るまでの伝統的な記述をも取り入れようとした。しかし、そのままでは不整合をきたす。そ

1 小川環樹(一九八一)は『四声篇海』に手を加えた書のうち最も優れたものが『字彙』であるとされており、『字彙』が『四声篇海』の使い分けを取り入れたとしても不思議はない。

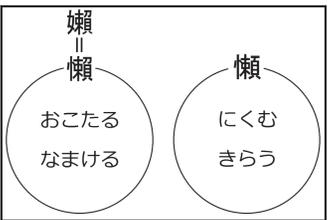
【図15】『字彙』

○又蒙弄切音夢義同 **憫** 聲激切音歎惶恐貌○又呼 **懶**  
 ○又莫更切音孟義同 **懶** 格切音赫楚人謂慙曰懶 **懶**  
 同 **懶** 落蓋切音賴 **懶** 慙○又叶盧健切音練蘇子由 **懶**  
**懶** 飛亭詩危亭在山腹物景行自變此樂只自知滂入任  
**懶** ○與上 **懷** 乎乖切音槐思也服也安也周書邦之榮懷  
**懶** 字不同 **懷** 又智臆也又蕪也西禮其有核者懷其核又

同右

借女 **嬾** 餘輕切音盈 **嬾** 全廉切音 **嬾** 魯簡切蘭上  
 字 **嬾** 娥嬾美好也 **嬾** 鹽女字 **嬾** 聲懈息也  
 六書正諺女性多怠故 **嬾** 乎乖切音 **嬾** 先彫切音 **嬾** 伊  
 从女別作懶嬾並非 **嬾** 懷和安也 **嬾** 消女字 **嬾** 嬾伊

【図16】『字彙』



ここで、「懶」と「嬾」の区別を導入することによって、整合性を保たせようとした。「懶」と「嬾」を別字としてしまえば、「嬾」と「懶」とが別字であること(【図14】)と、「嬾」が「懶」の俗字であること(伝統的な記述)とは矛盾しない。つまり『字彙』は、それまでの字書(韻書)の記述(「嬾」=「懶」と『四声篇海』の記述(「嬾」と「懶」の使い分け)に整合性を持たせるために、「懶」と「嬾」の使い分けを「與上懶字不同」として明確に打ち出したのである。

二一五 『正字通』

続いて、【図17】『正字通』を見る。『正字通』には、やはり「懶」「嬾」両字が親字として掲げられ、詳細な記述がなされている。「懶」については、「同嬾」としている。そこで【図18】の「嬾」

【図17】『正字通』(弘文書院本)

嬾 同嬾 廣韻同也 **憫** 許及切音吸惶恐貌又陌韻 **懶**  
 同嬾 杜肯詩失學從兒 **懶** 又寒韻音爾蘇軾次韻詩毛滂  
 芋火對懶殘說文作嬾唐書作嬾集韻又作懶懶 **嬾** 泥 **懶**  
 俗嬾字舊註落蓋切音賴惰懶嫌惡又叶音練蘇轍開燕亭詩  
 危亭杜山腹物景行自變此樂只自知傍人任嫌懶與上懶字

の項を見ると、『説文解字』の「懈也怠也」という字義が引かれており、こちらは「おこたる・なまける」であるところから推して、

不同按樂城集本作懶註任人嫌已懶怠我樂自若懶之轉聲  
 韻音練猶賦詩之轉寒韻音爾非懶與懶分二字六書無懶舊  
 註合嫌惡訓惰 **懷** 乎才切音槐說文念思也擇名懷回也本  
 柳音義並非 **懷** 有本意回就已也周書邦之榮懷詩小雅

一方、「懶」については、「俗嬾」とある。そして、『字彙』の記述を引く。しかし、その引用には誤りがある。蘇轍の「閑燕亭」を引用した後、「與上懶字不同」という『字

【図18】同右

專訓美好 **嬾** 俗字舊註音 **嬾** 魯感切關上聲說文懈也  
 專屬秦姓泥 **嬾** 延女字泥 **嬾** 怠也一曰臥也正諺女性  
 多怠故从女謂俗不當別作懶懶按懶與嬾通俗作懶嬾贊正  
 諺泥女性必从嬾廢懶非又慵懶故臥非嬾即臥也說文第二  
 訓亦非又嬾有上平二聲蘇軾次韻毛滂詩芋 **嬾** 舊註音懷  
 火對懶殘註平聲讀如關舊本副平聲尤非 **嬾** 和安也唐

同」という『字

『彙』が打ち出した区別を引いているが、「與上懶字不同」となっており、文意が通らない。版本レベルでの誤りであれば記述の混乱ということにはならないが、この他早稲田大学蔵の清畏堂本など数種の版本を見てもやはり「與上懶字不同」となっており、正しく引用されている版本は今のところ見つけられていない。記述の混乱とみるのが妥当であろうか。

その後、「按」として『正字通』独自の記述が始まる。この部分には「懶」と「懈」の使い分けに関して『正字通』の説明がなされているようではあるが、現段階では解読に至っていない。この点については今後の課題としたい。一つだけ指摘しうることとしては、「欒城集本作懶」とあるが、【図19】京都大学附属図書館所蔵（近衛文庫）の『欒城集』（明刊の木活字本）

を確認すると、「懶」になっているということが挙げられるが、いずれにせよ、この部分に関しては詳細な検討が必要である。

閑燕亭  
登山給已高。曠望良亦遠。危亭在山腹。物景行日變。諸峰宿霧收。草木朝陽絢。盜盜雲出山。溜溜泉垂坂。徐行得佳處。末日遂忘返。此樂只自知。傍人任熯懶。

## 二一六 『康熙字典』

最後に、【図20】『康熙字典』を見る。『康熙字典』においても両字は親字として掲げられている。まず「懶」について見ると、『広韻』『集韻』『説文解字』を引き、「與懶同」「懈也怠也」としている。そこで【図21】の「懶」の項を見ると、やはり「怠也」「按與懶同」とあり、「懶」と「懈」は同じものとして捉えられているようである。しかし、よく見ると、「懶」の項には「與懶同」とあるにもかかわらず、【図21】の親字は「懈」として掲げられており、同一字書内での不統一が見られる。

次に「懈」であるが、「憎懶嫌惡也」とし、『字彙』が引いていた蘇轍の「閑燕亭」を引く。そして、「按正字通云」として『正字通』の記述を引く。それによれば、「懶訓同懶」「懶訓俗懶字非」、つまり、「懶」と「懈」は同じ

### 【図20】『康熙字典』

偃切音懈。恨也。懶。集韻郝格切音赫。楚人謂慚曰懈。又廣韻落早切。集韻魯早切。恭與懶同。説文懈也。怠也。曰臥也。亦作憊。懶。憎懶嫌惡也。又叶盧健切音癩。蘇轍閑燕亭詩危亭在山腹。景物行自變。此樂只自知。傍人任熯懶。○按正字通云六書無懶字。懶訓同懶。懶訓俗懶。字非。懷。古文。褒。唐韻戶乖切。集韻韻會乎乖切。音槐。説文念思也从心衷聲。論語君子懷德。

### 【図21】同右

字。廣韻戶乖切。集韻乎。嬾。唐韻落早切。怠也。一曰臥也。手切。音懷。安和也。嬾。女性多怠。故从女。○按與懶同。又讀平聲。蘇軾次毛滂。嬾。集韻先彫切。音蕭。女字。嬾。廣韻集韻。詩芋火對嬾。殘註。嬾。讀若闌。嬾。音蕭。女字。嬾。从伊。旬切。

字義に「懈」と同じ「怠」があるはずである。しかし、字義としては「憎懶嫌惡也」のみが掲げられており、やは





「らんだ」の項においても「懶」から「懶」へと変更されて出版されている。また、「字音らい？」という書き込みも見られる。これは何を意味したものか判然としないが、これもその説に触れて書いたものであろう。大槻文彦がどこでその説に触れたのか、はっきりしたことは言えないが、当時の影響力を考えると『康熙字典』と考えるのが妥当だろうか。

### 三二二 『墨汁一滴』『懶惰の説』等

次に、一九〇一年に新聞『日本』に連載された、正岡子規の『墨汁一滴』についてである。子規は、三月四日の連載で、「誤りやすき字」としていくつも漢字を列挙している。その中に、「頼懶懶懶などの旁は負なり頁に非ず」という指摘がある。何を参照したのかわからないが、子規がこのような規範意識を持っていたことが窺える。「負」と「頁」を区別するという規範意識は、「懶」と「懶」を別字とする説を受け入れる土壌になりうるように思われる。

なお、【図27】『隸書大事典』を見てみると、延熹六年（一六三年）の桐柏廟碑から永康元年（三〇〇年）の張朗墓碑に至るまで、隸書の時代から「負」と「頁」は区別なく使われていることがわかる。

### 【図27】『隸書大事典』



また、「はじめに」で引いた谷崎潤一郎の『懶惰の説』は、この説が受け入れられた一つの事例となる。もっとも、谷崎は『字源』の説に従っただけであり、その規範意識は専ら『字源』に支えられていたといえる。なお、『字源』は『康熙字典』の記述に則っているため、この説が採用されたのであろう。関連して、他の漢字辞典を見ると、『大字源』では「一説に、懶・懶はもと別字で、のちに混用されるようになった」ととされている。この記述が何によるものかわからないが、第二章で述べた通り、むしろ最初は区別がなかったと考えるべきである。また、『大漢和辞典』では、「懶」を「懶の俗字」、「懶」を「懶に同じ」としており、『康熙字典』の区別は採用していない。

### 三二三 土橋八千太『康熙字典の修正に就いて』

最後に、雑誌『斯文』（第二十三篇第二十三号 一九四一）に収められている、土橋八千太『康熙字典の修正に就いて』について述べて本章を終えたい。

土橋は、『康熙字典』の「懶」の記述に関して、「この解釈は受け入れることが出来ない」としている。その理由として、次のように述べている。

第一に康熙字典は、広韻の懶の字の反切が落早切であると云って居る。然るに広

韻の落早切の字には、嬾と懶とがあって、懶はない。故に広韻からの引用は誤って居る。又、広韻には嬾も懶もないから、広韻が懶を嬾に同じとしているということも誤って居る。

第二に康熙字典は集韻を引用して居る。然し懶の字に関しては、集韻が誤って居るのであるから、それに従うことは出来ないのである。

集韻には嬾と懶とが載せてあって、「嬾、懶、魯早切、説文、懈也怠也一曰臥也」とあるが、この説文の解であるとしてある解は、説文の嬾の字の解であって、嬾又は懶の字の解ではない。説文にはただ嬾の字があって、嬾も懶も無いのである。(引用に際し、漢字は差し支えない箇所に関しては通行の字体に改め、仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。)

土橋のこの論の背景には、子規が持っていたものと同じ規範意識がある。すなわち、「負」と「頁」は別であり、正しくは「嬾」「懶」であるという意識である。「負」と「頁」は別であるという規範意識はどこから生じたのかわからないが、正しくは「嬾」「懶」であるという規範意識は『説文解字』から来ている。『説文解字』の記述を絶対の規範意識として持つ土橋は、『説文解字』に則っていない記述を非とするが、『説文解字』を無条件に規範としてしまっている点でこの論は問題である。さらに、先述の通り、「負」と「頁」は別であるという規範意識は後代のもと考えられ、その規範意識に則って引用の誤りを説いている点にも問題がある。

土橋の論は、子規が持っていたような規範意識に無自覚なまま論じている点に問題がある。研究においては、無意識の中に潜む規範意識の存在に常に自覚的でなければならぬ。

#### 四 総括および今後の課題

以上、「嬾」と「懶」の区別について、中国の字書(韻書)を中心に、日本の事例に関していくつかの指摘をしてきた。

『集韻』によって「にくむ・きらう」という字義が追加され、「嬾」の字は二つの音と義を抱えることとなった。この状態は、漢字運用において不安定な状態であったのではないだろうか。同じ漢字に音義が複数ある場合、漢字の運用に支障をきたす恐れがある。そこで、『四声篇海』における「嬾」と「懶」の使い分けや、『字彙』における「嬾」と「懶」の使い分けなどが試みられ、形の上でも区別しようということになったのである。そこには、同一の漢字に音義が複数ある場合、形においても両者を区別し、漢字の運用を安定的なものにしようとする力学が働いているように思われる。

本稿では、中国の字書(韻書)を中心にみてきたが、この説の日本における享受のあり方について探る際には、やはり日本側の辞書類についても体系的に調べることがある。試みに、いくつかのものに当たってみた結果を少し示して、今後の展望としたい。

天治本『新撰字鏡』(書陵部蔵影印 大槻文彦(校刊)六合館 一九一六年)、黒川本『色葉字類抄』(中田祝夫ほか(編)『色葉字類抄 研究並びに総合索引』風間書房 一九七七年)、『節用集』(『節用集大系』一、四、二六、五一、九三、一〇〇 大空社

一九九三～一九九五年) に関しては、当該の字は見られても、特に使い分けが行われている形跡は見られなかった。『和訓栞』『倭訓栞 谷川士清自筆本 影印・研究・索引』三澤薫生(編著) 勉誠出版 二〇〇八年) に関しては当該の字を見つけることはできなかった。一つ、興味深いものとしては、【図28】観智院本『類聚名義抄』が挙げられる。「懶」については、「オコタル」という和訓が示されており、特筆すべき点はないように思われる。一方、「嬾」については、もう一つ「嬾」が掲げられている。和訓は「モノウシ」などを共通に持ち、字義上の区別はなく、異体字としての扱いのようであるが、「嬾」「懶」の二字を掲げている辞書類は管見の限り見当たらない。なお、『五本対照 類聚名義抄和訓集成』一、四(草川昇(編) 汲古書院 二〇〇〇、二〇〇一年) によれば、「懶」が掲載されているのはこの観智院本のみで、他の蓮成院本、高山寺本、西念寺本には見られないようである。

同右



【図28】観智院本『類聚名義抄』

懶 卽、嬾、情、龜、谷、棟、嬾、二、或、オコタル、モノウシ

これらの辞書類を中心として体系的に調査を進めることで、日本におけるこの説の享受のあり方が見えてくるだろう。また、辞書類の記述のみではなく、用例を集め、実際の享受のあり方についても調べる必要がある。その他、本論中で述べた課題とともに、版本に関しても、さらに調査対象を増やすことで、より正確な実態が見えてくるだろう。このようにして「懶」の字についてその実態を明らかにしていくことは、辞書類の性格や人々の漢字に対する意識を探る上で有益なものとなるだろう。本稿がその足がかりとなれば幸いである。

【引用文献】(引用順)

- 『谷崎潤一郎随筆集』(岩波文庫 緑五五・七) 一九八五
- 『説文解字注』(段注本) 上海古籍出版社 一九八一
- 『大廣益會玉篇』(張氏澤存堂本) 中華書局 一九八七
- 『唐寫本王仁昫刊謬補缺切韻』(北平國立故宮博物院本) 廣文書局 一九六四
- 『龍龕手鏡』(高麗本) 中華書局 一九八五
- 『重校宋本廣韻』(宋本廣韻 張氏重刊 澤存堂藏版) 廣文書局 一九六一(第二版)
- 『鉅宋廣韻』(上海圖書館藏宋刻本影印) 上海古籍出版社 一九八三
- 『廣韻 五卷』(上海涵芬樓借海鹽張氏涉園藏宋刊本) 出版社・出版年不明 ※タイトルは内題による。その他のタイトルは『宋本廣韻(題箋)』『廣韻(扉)』。
- 『集韻』(日本宮内廳書陵部藏宋刊本) 綫裝書局 二〇〇一
- 『集韻』(北京圖書館藏宋朝刻本) 中華書局 一九八五
- 『集韻』(上海圖書館藏古堂影宋鈔本) 上海古籍出版社 一九八三
- 『類篇 附索引』(上海圖書館藏汲古閣影宋鈔本) 上海古籍出版社 一九八八
- 『中国学芸大事典』 近藤春雄 大修館書店 一九七八
- 『校訂五音集韻』(崇慶新改併五音集韻影印) 中華書局 一九九二
- 『大明正徳乙亥重刊改併五音集韻』(早稲田大学図書館蔵)「古典籍総合データベース」<http://>

- [www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04\\_00036/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04_00036/index.html) (2014.1.28 閲覧)
- 『五音類聚四声篇海』(京都大学附属図書館蔵)「京都大学電子図書館」<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/k64/k64cont.html> (2014.1.28 閲覧)
- 『字彙 字彙補』(上海圖書出版社圖書館所藏靈隱寺刻本) 上海辭書出版社 一九九一
- 小川環樹「中国の字書」(貝塚茂樹・小川環樹(編)『中国の漢字』中央公論社 一九八一)
- 『正字通』(弘文書院刊本) 東豊書店 一九九六
- 『欒城集』(京都大学附属図書館蔵(近衛文庫))「京都大学電子図書館」<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/k147/k147cont.html>
- 『王引之校改本康熙字典』上海古籍出版社 一九九六
- 『景印文淵閣四庫全書』第二二九冊 臺灣商務印書館 一九八三～一九八六
- 『景印文淵閣四庫全書』第二三六冊 臺灣商務印書館 一九八三～一九八六
- 『私版 日本辞書 言海』第四冊 大修館書店 一九七九
- 『稿本 日本辞書 言海』第三卷 大修館書店 一九七九
- 正岡子規『墨汁一滴』(岩波文庫 緑一三四) 一九八四
- 『隸書大字典』伏見冲敬(編) 角川書店 一九八九
- 『大之源』尾崎雄二郎他(編) 角川書店 一九九二
- 『大漢和辞典』四 諸橋轍次 大修館書店 一九五七
- 土橋八千太「康熙字典の修正に就いて」『斯文』第二十三篇第二十三号 一九四二)
- 『天理図書館善本叢書 和書之部 類聚名義抄』三三、三三三 天理大学出版部 一九七六